

京都大学

生態学研究センター・ニュース

No. 4

— 目 次 —

京大大学生態学研究センター開所式挨拶 川那部浩哉	1	【びわ湖の辺「水の生態学の新たな展開を 探求する」ワークショップ】	
センターの共同利用	2	京大大学生態学研究センター運営委員会（第二回）7 議事要旨	
1．共同利用の受け入れ		京大大学生態学研究センター協議員会（第二回， 第三回）議事要旨	7
2．研究協力者の委嘱		センター員の紹介	8
3．1991年度公募研究会の採用結果について		雑報	10
4．1992年度の共同利用事業の公募について		読者の声	11
シンポジウムの案内	5	編集後記	11
【生物界における安定同位体に関する国際シ ンポジウム - 21世紀の展開をめざして - 】		今後のスケジュール	12
【5th International Colloquium on Endocytobiology and Symbiosis】			

京大大学生態学研究センター開所式挨拶（1991年10月16日）

川那部 浩哉

京大大学生態学研究センターを代表致しまして、一言ご挨拶を申し上げます。本日は皆様、たいへんご多忙のところを、私どもの生態学研究センター開所式にお越しいただきまして、まことにありがとうございます。

京大大学生態学研究センターは、ご案内のとおり、全国共同利用機関として、この4月12日に発足致しました。長年にわたって、この件につき弛みないご努力を続けてこられ、あるいはご尽力を賜わってまいりました、文部省、日本学術会議、日本生態学会、その他の関連諸学会、学術審議会、国際生態学連合、そして京都大学、さらにはご関係の皆様、あらためて深く敬意を表し、あつく御礼申し上げます。

生態学は、生物の生活に関する科学と言われ、生物と環境との間の関係に関する科学であると言われてきています。とくに、生物間の相互作用および生物とその物理・化学的環境との間の相互作用からなる極

めて複雑で動的な、しかも長い地球の歴史のなかで作られてきた、相互作用系総体の維持存続の流れを解明することは、現在とくに、学問・文化の発展にとって、不可欠の問題であります。さらに、われわれ人類がいま直面しております地球規模の環境問題も、この機構の究明とその研究結果の応用によってはじめて、根本的な方策が立てられるものであること、皆様ご承知のとおりです。そしてこのためには、日本国内はもとより、まさに国際的な共同研究によって、物ごとを進めていかなければなりません。

生態学研究センターはこの目的を考えますとき、現在のところは規模においても予算においても、まだ極めてささやかなものであります。しかし私どもセンターに所属する一同は、この重要な問題に迫る全国共同機関のまずは最初の段階として、努力を重ねて行く所存であり、いやすでにその方向に向かって努力をはじめております。

長期間にわたる野外研究地域を、いくつかの地方のさまざまな生息場所に関して確保することは、生態学にとってたいへん重要、いや必須のことではありますが、その最初の地域の確保については、ある地方自治体のご協力により、ほぼ見通しがつきました。共同利用のための実験装置を整備することは、これまた不可欠のことですが、現在大いに努力中であり、近い将来にはささやかながらその第一歩が踏み出せるものと確信しております。「環境変動と生物群集の多様性・弾力性」なる研究センター主催の第1回国際シンポジウムも、文部省の国際研究集会費援助を得て、この12月初旬に京都で開くべく準備が進んでおります。先には研究会を公募を致しましたが、今年度開催の3件がこのほど決まりましたし、この19日からは京都と大津とで、公開講演会を7回ばかり開くことにもなっております。来年度は、これらのほか、大学院レベルの実習を含んだ国際セミナーの開催、公募等による国内の生態学実習の手配、さらには、本格的な新しい共同研究の発足なども、予定しております。

生態学、特に、先に申し述べました「複雑で動的な、しかも長い地球の歴史のなかで作りがらわれて来た相互作用系総体の維持存続の流れの解明」には、国内・国際の共同研究・共同利用によって行う以外に、方法はありません。私どもセンターに所属する一同がそれに努力するのはもちろんながら、本日ここにお集まりの皆様を始め、多くの研究者、当局、さらには関係各位の積極的なご参加と、物心両面にわたるご援助の不可欠であることは言うまでもありません。

ここに、今までのご尽力に感謝致しますとともに、これからのますますのご援助・ご鞭撻を心からお願いいたしまして、センター長としての挨拶とさせていただきます。

センターの共同利用

1. 共同利用の受け入れ

運営委員会の共同利用専門委員会が、共同利用の受け入れの申し合わせ、あるいは内規について検討中です。協議委員会・運営委員会で最終的な決定がされることになってはいますが、共同研究の受入についての案の概要をお知らせします。

共同利用

- (1) 共同利用の種類は「共同研究」、「共同利用実験」、「研究会・実習・セミナー」、「施設利用(ビジター・システム)」である。
- (2) 「研究会・実習・セミナー」は公募により受け入れる。ただし、センター長が特に受け入

れを認めた件については、この限りでない。

- (3) 研究センターで(1)の共同利用を実施しようとするものはセンター長に所定の申込書を提出する。
- (4) 各種共同利用研究者のセンター内での扱いは、特別の場合を除き、センター研究員に準ずる。
- (5) すべての共同利用者は共同利用終了後、センター長に報告書を提出する。ただし、ビジターは含まない。

2. 研究協力者の委嘱

共同利用専門委員会では研究協力者について下記の提案を行なっています。研究協力者については今年度中に実施の予定ですので、今年度から希望の方はできるだけ早く、センター研究協力掛まで御連絡ください。

- (1) 生態学研究センター(以下「センター」という)の研究活動を推進するため、学内外の研究者に研究協力者を委嘱することができる。
- (2) 研究協力者は、協議委員会の議に基づきセンター長が要請し、本人の承認を得て、センター長が委嘱する。
- (3) 研究協力者の任期は原則として2年とする。

なお、現在のところ不十分ではありますが、外来研究者に利用して頂ける部屋と机を用意しております。

3. 1991年度公募研究会の採用結果について

以下の3件が採用になりました。

研究課題	代表者
琵琶湖の無脊椎動物群の固有性と地理的変異	大阪府立大学総合科学部 谷田一三
微生物群集の Diversity と特定微生物の動態に関する分子レベルからのアプローチ	信州大学医療技術短大部 加藤憲二
生きている土とは何か	京都大学農学部 平井英明

4. 1992年度の共同利用事業の公募について

今年度は生態学の発展にとって関連分野を含めた広がりのある共同研究の推進が大切なため研究会を公募しました。来年度は、生態学の若手研究者や研究者の卵の育成が大切であることから、生態学に関心をもったり、生態学を志す学生が野外調査を体験し、生態学的調査法を修得するための野外実習と、若手研究者が先達に学びながら生態学の将来を討論するための集中講義 & セミナーとを研究会に加えて新たに公募することになりました。

1992年度(平成4年度)京大大学生態学研究センター共同利用事業公募要項は以下のとおりですので、全国の生態学関係者の皆さんに多数の応募をお願いします。

1. 公募事項

- (1) 研究会：生態学およびその関連分野での重要な研究課題について研究結果のまとめ・現状分析・将来の具体的研究計画の作成などを行い、共同研究の推進に役立つもの。
- (2) 実習：学部学生・大学院生を対象として企画された生態学およびその関連分野の実習で、参加が全国に公開されるもの。なお、京都大学の实習として行われ、単位の支給が可能になる予定である。
- (3) 集中講義 & セミナー：大学院生等若手研究者を受講対象とする生態学およびその関連分野の集中講義 & セミナーの企画で、参加が全国に公開されるもの。

2. 開催期日

1992年5月1日から1993年2月末日までの期間。

3. 採択件数

予算の一部は未定ですが、研究会3件、野外実習約4件、集中講義 & セミナー約3件の予定です。

4. 応募資格

大学その他の研究機関に所属する研究者、またはこれと同等の研究能力を有すると認められる者。
なお、研究会には複数の研究機関から参加があること。

5. 申請方法

研究会・野外実習・集中講義 & セミナー別々に所定の様式による申込書を所属機関(部局)の長を通じて提出してください。申込書の必要な方は、下記の申込書送付先まで請求してください。

6. 申込書送付先

〒520 大阪市下阪本4-1-23 京都大学生態学研究センター 研究協力掛

TEL (0775)78-0579 FAX (0775)79-8457

(封筒の表に「共同利用事業申込書在中」と朱書きすること。)

7. 申込期限

1992年3月31日(火)必着のこと。

8. 選考

当センターにおいて1992年4月15日までにを行います。

9. 所要経費

研究会の出席者と野外実習・集中講義 & セミナーの講師の旅費と場合によってはその他必要経費の全部または一部を当センターにおいて支出します。研究会、野外実習、集中講義 & セミナー各1件30万円。

10. 報告書および論文の提出等

- (1) 共同利用事業終了後、1ヵ月以内に報告書を当センターに提出してください。なお、提出された報告書を当センターの報告書に掲載することを御承知おき願います。
- (2) 共同利用事業によって得た成果の論文等を発表されたときは、別刷り5部を当センターに提出してください。
- (3) 共同利用事業関係者は当センターの研究協力者として位置づけられます。

11. その他

この公募について、御不明な点がございましたら、当センター研究 協力掛に御照会ください。

シンポジウムの案内

【生物界における安定同位体に関する国際シンポジウム - 21世紀の展開をめざして -】

日 時：1992年9月1日(火)～3日(木)

場 所：三菱化成生命科学研究所

主 催：SIサロン

連絡先：三菱化成生命科学研究所 生物・社会地球化学研究室

〒194 東京都町田市南大谷11号

電話 (0427)24-6283

生物界を探索する人類の眼は、より詳細に、より精密に、静的にも動的にも、とどまるところなく進展を続けている。安定同位体組成は、それらのなかで、生物界に対する全く新しい次元の見方を人類に与えてくれる手段として、この10年間に急速に発展してきた。このシンポは、この発展の過程を総括し、安定同位体研究の21世紀に向けての展望を拓くことを目的としている。

今日、アイソトープという言葉は放射性同位元素を意味して使われることが多い。しかし、あらゆる物質は一定量の安定同位体(SI)を含んでおり、例えば、50kgの人体は225gの重い安定同位体を構成物質としている。では、この225gは一定不変のものであろうか。否、天然に存在するすべての物質の安定同位体組成は、その物質の物理的、化学的変遷の履歴によって変化する。それは、あたかもその物質の安定同位体存在比という指紋に相当するかのようである。すなわち、生体の主要構成元素である水素、炭素、窒素、酸素、イオンなどの同位体組成は、「呼吸する、水を飲む、食事をする、排泄する」という生命活動の営みのなかで、物質代謝の過程や生存環境に応じた固有の値となる。しかもこの固有の値は、反応の性質と、反応に参与する物質の統計熱力学的な性質によって決定され、そこには厳密な規則性が存在する。これはまるで、人間を含む自然界が、時空間にわたる壮大なスケールのトレーサー実験を演じているかのようである。従って、同位体比のゆらぎを精密に測定することによって、その分子、その物質の生成過程や、その個体の過去についての計り知れない量の情報を得ることができるのである。

シンポジウムのテーマ：

- (1) 同位体に規制された世界(Isotopically Ordered World)の解明
- (2) 生物地球化学的物質循環とその進化
- (3) 安定同位体比測定法の農業及び食品産業への応用
- (4) 生態系における同位体分布と地球環境問題
- (5) 分子内、分子間、器官、及び個体における親生元素の同位体分布
- (6) 有機及び生化学反応における同位体効果とその理論的取り扱い
- (7) 新しい安定同位体比測定法の開発と利用

生物界における安定同位体に関する

国際シンポジウム

— 21世紀の展開をめざして —

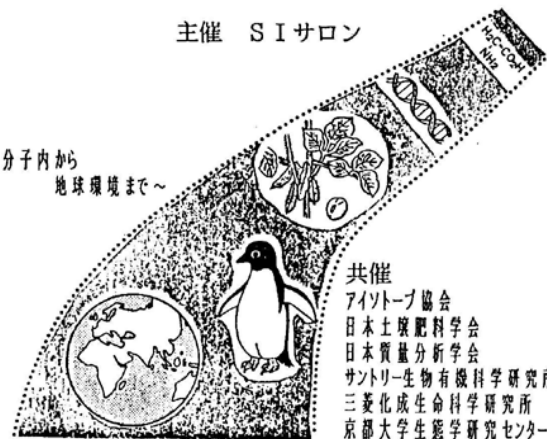


1992年9月1日～3日

於 三菱化成生命科学研究所

主催 SIサロン

～分子内から
地球環境まで～



共催

アイソトープ協会
日本土壌肥科学会
日本質量分析学会
サントリー-生物有機化学研究所
三菱化成生命科学研究所
京都大学生態学研究センター

【連絡先】

三菱化成生命科学研究所 生物・社会地球化学研究室
〒194 東京都町田市南大谷11号 電話 0427-24-6283

【5th International Colloquium on Endocytobiology and Symbiosis】

日 時：1992年6月23日(火)～27日(土)
場 所：京都
主 催：The International Society of Endocytobiology
連絡先：石川 統 東京大学理学部動物学教室
〒113 東京都文京区本郷 7-3-1
(電話) 03-3812-2111 内線 4446

主なテーマ：

- (1) 植物の共生における相互作用
- (2) 動物の共生における相互作用
- (3) 細胞間の認識及び共生における特異性
- (4) 真核生物の細胞器官の起源と進化
など

【びわ湖の辺で「水の生態学の新たな展開を探求する」ワークショップ】

日 時：1992年2月下旬(2泊3日の予定)
場 所：京都大学生態学研究センター(大津市下阪本)
主 催：京都大学生態学研究センター
文部省重点領域研究「地球共生系」総括班

目 的：近年水域の生態学研究は個体行動、種間相互作用、群集構造、生態系動態のそれぞれにおいて、新しい方法、理論的アイデアが生み出され急速な発展をとげつつある。問題の宝庫であるびわ湖を対象に集中的な共同研究を行なうことにより、これらの新しい生態学研究の流れの中で飛躍的な成果が生まれることが充分期待できる。一方、長年にわたる関係者の努力の結果、いくつかの研究拠点が確立されてきた。いまや、これらの間のネットワーク化を促進することにより、持続性の高い組織体制を確立することが可能な状況にある。まずは、びわ湖研究に携わってきた研究者のみならず、関わったことのない研究者も含め、広く関心ある研究者が集まり、びわ湖に関する魅力的な研究テーマ、新しい捉え方、アプローチ等を自由に語り合う機会を設けてみようと考え、表題のような研究会を開催することになった。

世話人：中西正己、安部琢哉(京都大学生態学研究センター)
東 正彦(重点研「地球共生系」総括班)
連絡先：中西正己 京都大学生態学研究センター
〒520-01 大津市下阪本 4-1-23
(電話) 0775-78-0580
(FAX) 0775-79-8457

京都大学生態学研究センター運営委員会（第二回）議事要旨

日 時：1991年10月15日（火）

場 所：京大会館

出席者：協議員7名，運営委員14名，幹事2名

議 題：

1．教官人事の方式について

センター長が「京都大学生態学研究センター教官人事選考内規」，および「京都大学生態学研究センター運営委員会における教官人事選考に関する申合せ」に関する両案を提案し，運営委員会として了承した。

上の了承に基づき，1992年3月に停年退官される三浦泰蔵氏の後任人事を行うために，協議委員会の議を経て，運営委員会の専門委員会として人事基準委員会を設けることを了承した（センター長を含めて6名で構成）。

2．1991年度京都大学生態学研究センター公募研究会の審査について

共同利用専門委員会の審査結果を了承した。

3．センターにおける共同利用のあり方

共同利用専門委員会からの答申を受けて，今後の基本的な方針を検討した。

4．1991年度予算案を了承した。

京都大学生態学研究センター協議員会（第二回，第三回）議事要旨

第2回協議員会

日 時：1991年10月15日（火）

場 所：京大会館

出席者：協議員7名，幹事2名

第3回協議員会

日 時：1991年11月14日（木）

場 所：京都大学生態学研究センター分室会議室

出席者：協議員11名，幹事2名

議 題：

1．教官人事の方式について

「京都大学生態学研究センター教官人事選考内規」案を，「京都大学生態学研究センター運営委員会における教官人事選考に関する申合せ」案を付した上で，センター長が提案し，原案を可決した。

2．1991年度予算案を承認した。

なお，次回以後は，協議員会と運営委員会とは別々に開くことが望ましいとの発言があり，多数の賛成を得た。

（文責 安部琢哉）

センター員の紹介

遊磨正秀（生態進化研究部門）

京都の西、清滝川でゲンジボタル幼虫の調査を始めたのが最初の仕事でした。特に、蛹化のために川から上がってくる幼虫（上陸幼虫）が季節とともに小型化する現象に興味を持ち、なぜそのような変化が生じるのかについての研究に焦点を当てました。そして、卵にも大きさの違いがあり、上陸幼虫の大きさは卵の大きさに起因していることを、1個体ずつ個別に飼育して確かめました。面白いことに、卵でも上陸幼虫でも、大きいものは相対的に低温で、小さいものは高温で生存率が高く、1つの個体群の中にもいろんな属性の個体がいることによって個体群がより安定して維持されているものと考えました。ただしこの場合、個体の属性は「大きさ」という指標で測るに留まってしまいました。

清滝川は自然状態に近い場所だったのですが、その後、銀閣寺の疏水の個体群を観察してみて、ゲンジボタル、川の生き物、さらにいわゆる「自然」という概念に対する考え方が変わりました。疏水は完全に人口の水路で、清滝川に比べれば成虫の行動などはかなりの制限をうけていますが、ちゃんと個体群を維持しています。考えてみれば、今や人手の加わっていない川は、まずありません。近くに人が住めば、川の流路を固定する、土手を強化する、取水のために堰を作るなど、必ず人手を加えます。ゲンジボタルなどはそのような人手の加わった場所に生息してきた生き物だったのです。

1990年から滋賀県の琵琶湖博物館の設立準備に関わり、人と自然の関わりについて考えはさらに変わりました。ホタルはかつては集落の周辺、それも下手に多かったのです。つまり人の生活で少し「汚れた」所に多く生息していたのです。最近ホタルが減ったと言われます。なぜ？と問うと、水が「汚れた」からという答えが多い。そうじゃない、下水道が整備されて、川に「汚れ」ものを流さなくなったからだ、という場合も少なくないと思うようになりました。もちろん、河床の構造や河川周辺の状況の変化も見逃せません。さらに、「夜はビールにナイター、ホタルなんか見にいかにへん」という声のように、人の側の生活様式がホタルを「見えなく」している一方で『「きれいな」水＝ホタル』という図式によって歪んだ社会価値をつけられてしまったのです。ホタルを語るには、まず人の側の作用、そしてその作用を産みだした社会的背景の探求が必要です。もっと根っこの問題は、人の認識、つまり「きれい」とか「汚れた」という感覚にあるようです。

ホタルと並行して、もう2つの研究テーマを持っています。1つはアフリカ大陸のタンガニカ湖の生物群集に関する研究です。タンガニカ湖プロジェクトは1979年から始まっていて、50人近い研究者が関わってきました。私も1985年から1988年の間、合計2年ほどタンガニカ湖湖畔で生活してきました。湖には魚類や貝類などがみごとに適応放散しているばかりでなく、狭い場所にもかなり多数の種類が共存しています。なぜそんなにたくさんの種類や個体が隣りあって生活できるのか、そんな単純な疑問の答えを模索しているところです。タンガニカ湖の魚類相の大半を占めるカワスズメ類では、食物や繁殖場所などを微妙に分割しているだけでなく、隣りあって生活することによる利益が以外に大きいのではないかと、そんな考えに至っています。

もう1つは琵琶湖の生物群集です。これはむしろこれからのテーマです。琵琶湖はタンガニカ湖と肩を並べるほど古い湖で、琵琶湖特有の生物群集を形成していました。その意味で、タンガニカ湖あるいは他の古い歴史を持ち、固有の生物群集が形成されている湖との比較で進めていきたい研究です。また琵琶湖博物館の話に戻りますが、琵琶湖の生物に関する資料を検討していて、変わったと言われる琵琶湖の生物群集の様相、あるいは変わる前の様相を示す資料が乏しいことに気づきました。変わった後の様相に関しては、これまた人為、つまり漁獲、放流、また環境改変など、人との関わりにおいて進めていかなければならないテーマです。さいわい今は琵琶湖総合開発が一段落して、人為改変の勢いが緩まる時期ですので、魚類や貝類などを中心に、この機会に調べられるかぎり調べておこうと思っています。

杉本敦子（生態進化研究部門）

専門分野：特になし（interdisciplinary）

名古屋大学水圏科学研究所で学位を取得。学位論文では日本海の降雪機構を水の安定同位体の挙動から論じ、それまで現象論的にしか論じられてこなかった、降水の安定同位体に関する現象を雲物理の立場から説明した。研究の進め方など反省すべき点は山ほどあるが、結果的には私らしい研究が行なえたと思う。

現在のテーマはバクテリアによるメタン生成機構に関してである。このテーマは1990年1月に、三菱化成科学研究所に、和田英太郎当時部長の下ポスドクになってから、始めた仕事である。メタンの安定同位体比は非常に大きな変動を示しており、この変動がメタン生成経路の変動、つまりバクテリアの活動の変動によることを明らかにした。メタンの安定同位体比を使って地球規模のメタン収支につなげていくためには、このようなバクテリアの活動が何によって決まっているのかを大雑把にでも把握していく必要がある。水田、湿地では end Product のメタン体比からその生成経路の推定を可能にした。バクテリアの活動の変動を把握しメタンの放出量を推定し、それが地球全体の気候にどの程度影響を与え、またそのことによってバクテリアの活動がどのように変化するかを予測するという一連の仕事が進めば、IGBP の大きな成果となりうるものと思う。もちろん私自身ができる仕事はこのうちの一部にすぎないが……。

多くの人にとってそうであるように自分の学位論文のテーマには特別の愛着（or 執着）心があるもので、地球表面付近の水循環をやってみたいと今も思っている。水は生態系の維持にはなくてはならないものである。特にメタン生成菌のような絶対嫌気性菌の活動を予測するには水の問題は避けては通れない。ガス代謝と水循環とあわせて地表面プロセスとして global model につなげてゆきたい。

田端英雄（温帯生態研究部門）

日本産シラカンバ属植物の生態の研究で、私の研究は始まりました。特に道管の形態と生活場所の条件との関係、solitary な生活をするか gregarious な生活をするかといった種特性と繁殖特性の関係、萌芽や葉の発生様式と生活特性との関係等に注目して、研究を行ないました。

その後、小笠原諸島で、植物社会学的方法とは違った観点からの植生の分類と、各植生の生態的特性の比較、造林樹種として人為的に持ち込まれたリュウキュウマツが小笠原に定着する機構等に関する研究を行ないました。

1976年からは、主としてネパールヒマラヤで、植生と植物相の研究をはじめました。特にヒマラヤにおける地形の特性と関連した植生分布の特性とか、ヒマラヤ山地での地形と気象、日華区系の植物と地中海植物ないしは地中海植物に近縁な植物の生態地理、ヒマラヤの上昇と関連した生物地理、ヒマラヤ地域における古生態つまり古気候や植生の復元といった問題の研究を続けています。植生誌が完成していない外国での植生研究には正確な植物の同定が求められます。ところが、その同定が思うように進まず研究の進展はちちとしています。最近になって、ようやくめどがたち始めたといったところです。同定のすんだ植物標本は、京都大学とネパール森林省の標本庫に保存するだけでなく、東京大学、イギリスの自然史博物館、ハーヴァード大学などの標本庫にも保存するようにしています。

ヒマラヤの自然、特に温帯域における植生の荒廃はたいへん進んでおり、その修復は緊急の課題になっています。しかし、ネパールには造林の歴史は浅く、造林のための生態学的基礎の蓄積がまったくといっていいほどありません。今後は、私たちの調査研究を、森林修復のために生かす方向での研究を、進めたいと思っています。

藤田 昇（温帯生態研究部門）

大学院時代に行った研究は、ギボウシ属植物の種の比較生態学的研究で、ギボウシ属の生育場所と地理的分布の広がりとお出現頻度、水分生理からみた適応能力、繁殖特性、葉形の發育変異を種間で比較した。生態・地理分布が狭い種は特定の水分環境にはよく適応しているが、適応の幅が狭く、少産であるのに対し、生態・地理分布が広く、ギボウシ属の中で優占的な生活の種は水分生理の適応の幅が広く、多産で、葉形の発生においてネオテニー的変異を示すことを明らかにした。その後は植物群集を研究対象とし、主にブナ林とミズゴケ湿原を扱った。ブナ林では、ブナ林の日本海側と太平洋側の間での構造・組成の差とササの生育状況の違いとの対応関係に注目した。高木層をブナが圧倒的に占め、亜高木層が発達せず、低木層が豊富な日本海側のブナ林に対し、太平洋側のブナ林は高木層のブナの占有率が低下し、亜高木層が発達し、低木層は貧弱である。その差を、一斉開花・枯死するササの性質とササの茂り具合、ギャップでの再生様式の両者での違いと対応づけて考えた。ミズゴケ湿原は京都市深泥池浮島を対象とし、湿原の再生・遷移の進行はミズゴケ類の消長によること、ミズゴケ類の消長は浮島の場所によって異なる浮沈のパターンと水質に対応することを示した。具体的には、冬季の冠水が浅く、水が酸性に保たれるとミズゴケはよく成長するが、冬季深く冠水し、中性に近い池の水の侵入の影響を受けるとミズゴケは死滅する。今年度は水質の富栄養化によりミズゴケ湿原が退行する原因について今までの常識に反する結果を得ている。

当面は、ミズゴケ湿原の再生・遷移と環境との関係とブナ林の維持機構と種の多様性の解明を研究の柱とし、ミズゴケの生理・生態を通じた生理生態学と日本のブナ林を対象とした植物群集生態学の発展をめざしたい。

雑報 1991年度秋期国立大学臨海臨湖実験所長会議

全国22国立大学の臨海臨湖実験所（うち、大学付属4、理学部付属18）は古くから所長会議を組織して、相互理解と各実験所の発展に努めてきましたが、京大・生態研センターの設立に伴い、センターは旧大津臨湖実験所の跡を引き継いで、今後も所長会議のメンバーとなることが所長会議で承認されました。所長会議は年に2回開催されますが、春期は東京（原則として国立教育会館）で、秋期は各実験所持ちまわりで開催されております。

本年度の秋期所長会議は去る10月17日に高知大学海洋生物教育研究センター（高知県土佐市宇佐町）で開催され、筆者がセンター長代理として出席しました。会議では、議長、幹事および各実験所からの報告のあと、次年度における公開臨海臨湖実習の計画、臨海臨湖実験所の将来像、等について論議が交わされましたが、会議終了後の夕方からは懇親会が開催されました。

高知大学海洋生物教育研究センターは理学部付属宇佐臨海実験所と農学部付属水産実験所が発展的に統合され、1978年4月に学内共同利用期間として発足しましたが、教授2、助教授1、助手1という少ないスタッフにもかかわらず、実験研究棟（鉄筋4階、延1,527m²）、宿泊棟（鉄筋2階、延855m²、64名収容）、水槽棟（618m²）、飼育実験棟（169m²）、船舶（豊樹丸、19ト、定員40名；ネプチューン、6ト、定員34名）と建物・設備は非常に充実しており、多数の研究生と大学院生が研究に励んでおりました。5部門を擁する京大・生態研センターもせめてこの程度の規模の施設を備えたいとつくづく思いながら帰学の途につきました。（文責：手塚泰彦）

~~~~~ 読者の声 ~~~~~

人事が京大出身者にかたまりないようにして研究活動を活発におこなって下さい (H. U. さん)  
生態学研究者に巾広く、公平にセンターで活動できるものになることを期待する (N. O. さん)  
あまり専門家集団になりすぎず、広く他分野および一般から、あるいは一般への情報を取り扱うことを希望します (M. T. さん)

local な生態研究もとりあげて頂きたい。地方の研究者にも有益な情報をのせてほしい (H. N. さん)  
生態系生態学に関する研究志向及び研究体制が弱い。これで地球環境問題に効果的に社会的要請に応える研究ができるでしょうか (S. N. さん)

生態学的視点からの助力が乏しいために、行政がどう対応してよいか困っているケースが多々あります。環境問題に生態学が貢献するため、たとえばドイツ、アメリカにおける景観生態学のように研究成果を積極的に行政施策へ反映することを目指した研究部門 (応用生態部門?) や体制も必要 (T. N. さん)

若年研究者育成のために、独立した生態学研究室を持たない大学の大学院生や地方自治体、民間の研究機関の研究者のための調査法 (general survey) に関するトレーニングコースを各専門分野の講師を招いて実施するのはどうか? (K. A. さん)

各成帯域 (温帯・熱帯以外も) の固定された継続調査フィールドの設立を急ぎ、他機関をも含めた共同の長期的研究体制の整備をすべきである (T. N. さん)

センターとして各種資料・標本の資料・保管利用の機能を持つべきと考えられるが、その計画を知りたい (M. H. さん)

生物科学ニュースのように毎月でること、公募や生態関係のシンポジウムがもれなく、早くのることが必要 (S. N. さん)

息切れしないようがんばってほしい (A. H. さん)

センターに寄せられたコメントの中から独断と偏見をもって選ばせて頂きました (T. A.)

----- 編集後記 -----

- ・最も広い意味での生態学にかかわるホットな情報を掲載していきたいと思います。学会や研究会開催、生態学の研究の進め方などについての情報をお寄せ下さい。
- ・4月12日の発足以来、パンフの制作、開所式、公開講演会、公募研究会、IGBP シンポの開催とあわただしい日が続いてきました。「張り切ったつるは切れやすい」。酒の飲み過ぎ、煙草の吸い過ぎ、仕事のし過ぎ。みんな止められないことでしょうか健康には気をつけて、来年もしっかりやりましょう。
- ・ニュースレターの発行には筒井なおみさんの多大なる協力を頂きました。厚くお礼申し上げます。

(文責 T. A.)

---

京都大学  
生態学研究センター・ニュースの問い合わせ先  
京都大学生態学研究センター・ニュース編集係

---